

アンドルー・カーネギー

—— 社会進化論者かスウェーデンボルグジャンか? ——

大 賀 睦 夫

I はじめに

カーネギー・ホールで名高いアメリカの大富豪・慈善事業家であったアンドルー・カーネギーが、スウェーデンボルグの宗教思想によく通じていたという事実は、あまり知られていないのではないだろうか。しかし、実は彼自身、自伝の中でたびたびスウェーデンボルグに言及している。スウェーデンボルグに興味のない読者にとって、これはあまり記憶に残らない瑣事かもしれない。しかしスウェーデンボルグの思想を知っている人なら、これは見過ごすことのできないカーネギーの思想の根幹に関わる事実であると直感するであろう。

カーネギーはアメリカ史上もっとも成功した実業家の一人であり、最大の慈善事業家、そして数冊の書物を著した社会思想家であった。彼の社会思想家としての貢献は、「富の福音」という考えを表明し、それを実践したということであろう。彼は生前余財のほとんどを社会の利益になるように処分し、遺族には多くを残さなかった。このような彼の考えと行いはどこからくるのだろうか。

アメリカの社会思想史においては、カーネギーは代表的な社会進化論者 (Social Darwinist) の一人とされてきた。たしかに彼はハーバート・スペンサーと親交があり、彼の弟子を自認していた。しかし彼の慈善事業家としての行為をスペンサー流の社会進化論から説明するのは無理がある。結局、社会進化論者でありながら師の教えに従わなかったとか、カーネギーは矛盾に満ちた人だったといった評価になってしまう。しかし慈善事業家としての行為を、彼が

少年時代に強い影響を受けたスウェーデンボルグの思想とのつながりで解釈してみると、それはごく自然なことであったように思えるのである。本稿は、スウェーデンボルグの影響という観点から慈善事業家カーネギーの生涯をふりかえってみようとする試みである。

Ⅱ カーネギーとスウェーデンボルグ

1 カーネギーの略歴

まずカーネギーの略歴について触れておこう。1835～1919年、アメリカの鉄鋼王。貧しい田舎の少年から努力して大企業家となり、一躍億万長者になるという、アメリカにおける立身出世物語の典型的なヒーローである。父親はスコットランド、ダンファームリンの織物工であったが、動力織機の出現により生計が成り立たなくなり、1848年に一家でアメリカはピッツバーグ隣町のアレゲニー・シティに移住した。カーネギー13歳のときである。彼はアメリカに来るとすぐに繊維工場のボイラー焚きとして働きはじめ、電信会社の電報配達夫を経てペンシルベニア鉄道の事務員兼電信技士になった。そこでビジネスの才覚を大いに発揮した彼は、幸運も手伝って24歳でペンシルベニア鉄道の管理者に昇格した。南北戦争が始まるとワシントンで陸軍次官の補佐官として軍用鉄道と電信通信の仕事を統括した。1861年9月以降は鉄道会社にもどり、その仕事のかたわら、レール、鉄橋、石油などの鉄道関連会社を組織した。南北戦争終結直前に鉄道会社を辞め、投資した会社の経営に専念する。

この当時の彼の年収は約5万ドルで、大統領の年収の2倍、平均的アメリカ人の年収の100倍であった。彼は富を愛し金儲けに励みながら、同時にそれは最悪の偶像崇拜であると自覚し、これを続けていくなら永遠に救われない人間になってしまうかもしれないという不安をいだいていた。そこで彼は35歳で引退し、年5万ドル以上は稼がないという誓いを立てた。また過剰な収入は立派な目的に役立つよう分配すると約束した。⁽¹⁾

(1) Edge (2004), p. 51 参照。

しかし事業欲と富への誘惑がまさった。鉄に対する鋼鉄の優位が明白になると、1873年、ベッセマー製鋼法による製鋼所をつくり、以降はその経営に全精力を傾けた。80年代はいくつかの競争企業を支配下におさめ、アメリカ最大の鉄鋼会社カーネギー兄弟社を設立した。

80年代はまた著述家カーネギーが誕生した時期でもあった。イギリス、スコットランドへの旅行記を手始めに、1886年には、アメリカの政治体制こそ最善であり、民主主義が国を強くするという趣旨の『勝利する民主主義』を出版した。同じ論法でカーネギーはイギリスの君主制への強い嫌悪の情を表明した。

カーネギーが巨万の富を築いた1870年代から20世紀初頭にかけてのアメリカの「金ピカ時代」は、少数の金持ちが富を享受し、大衆が貧困に苦しんだ時代だった。カーネギーも多くの経営者と同様に労働者に低賃金・長時間労働を強いた。ただし、労働者の団結権を認め、ストライキの際にスト破りを雇うことには反対するなど、労働者の友人であると自負していた。しかし1892年7月に起きたホームステッド工場のストライキは、死者10人、負傷者数百人を出す大惨事となった。これは彼の会社経営における最大の痛恨事であった。

1900年、『富の福音』を出版する。これは長年の金儲けに区切りをつけ慈善事業に転進することの決意表明だった。1901年、彼はカーネギー鉄鋼会社を合衆国鉄鋼会社に売却して引退。手にしたお金は3億ドルだった。引退前にすでに図書館、教会オルガン、プール、音楽ホールなど1,600万ドル相当の寄付をおこなっていたが、引退後は自らの財産を用いて、彼が言うところの「科学的慈善事業 scientific philanthropy」を実践した。今日のカーネギー・メロン大学、カーネギー財団の設立など、寄付は主として教育や科学の振興に向けられた。熱烈な平和主義者として平和機関への援助もおこなった。勇敢な人々の善行に酬いるため、またその犠牲となった人々の遺族のために善行基金も創設した。ほんとうの善行を永続的に行うというのがカーネギーの夢であったが、それは彼が援助した2,800を超える図書館や今日まで続いている11のカーネギーの協会や基金を通して実現されている。

1998年の『アメリカン・ヘリテージ』で、カーネギーはアメリカ歴代富豪番付の2位にランクされた。ちなみに1位はロックフェラーで、ビル・ゲイツは5位。彼が生前慈善事業に使ったお金は全財産の約90%、3億5千万ドルであった。死後に残された財産は3千万ドル。そのうち2千万ドルはカーネギー・コーポレーションに寄付され、親族や友人の年金などのために残されたのは1千万ドルのみであった。

2 スウェーデンボルグの宗教思想との出会い

自伝によると、カーネギーの両親は貧乏ではあるが正直者であった。そしてよく読み、よく考えるというのがカーネギー家の家風であった。宗教は長老派であったが、教義的な理由から父親がその教会をやめ、スウェーデンボルグ派の教会に移った。陰鬱なカルヴィニズムにはがまんがならなかったらしい。このあたりの事情を、長くなるが自伝から引用してみたい。スコットランド時代の話である。

私の幼少時代、周囲の環境は、神学や政治の問題に関してひどく動揺し、不安な状態にあった。特権階級の打倒、市民の平等、共和主義など当時としてはもっとも革新的な思想によって、政界はいつも騒乱をきわめていたが、宗教の問題についても異論百出で、感受性の強い少年は、大人が想像しないほど多くそれを受け入れて、幼い胸にきざみこんでいたのであった。カルヴィニズムのきびしい教義は、おそろしい悪魔のように私の上に重くのしかかってきたのを、私はよく憶えている。しかし、さきに述べたように外部からの多くの刺激によって、そのような心境からまもなく脱出することができた。ある日、牧師が、幼児も死ぬと地獄の罰から逃れることができないと説教したのをきいた父は憤然として席を立ち、長老教会から籍をぬいてしまったのであるが、私はこれを尊いものとして胸におさめて成長したのであった。これは、私が生まれてからまもなく起こったことであった。

父はこのような教義を許すことができなかつた。「もしそれがあなたの宗教で、またあなたの神であるならば、私はもっとよい宗教ともっと崇高な神をもとめて他へ行く」と言つて、教会を離れた。父はふたたび長老教会に帰らなかつたが、他の宗派の教会に行くのはやめなかつた。私は、父が毎朝、大きな戸だなにはいって祈っているのを見たが、これは強く私の印象に残っている。父はほんとうに聖人のような人で、終生信仰心の厚い人であつた。彼にとってあらゆる宗派は善を行うための機関であると考えていたのである。彼は、神学にはいろいろ学派があるが、宗教は一つであることを発見したのである。私は、父が牧師より真理をよく知り、天の父を旧約聖書が描いている残酷な復讐の神と見なさなかつたのを非常に満足に思つていた。⁽²⁾

ここに見られるように、カーネギーはスウェーデンボルグの宗教思想の本質を的確に捉えており、その教えに深い尊敬の念を表している。カーネギーが正しく理解したように、スウェーデンボルグによれば、神は愛そのもの、善そのもの、慈悲そのものであり、神が人を罰することはありえない。ましてや神があらかじめ地獄に行く人を定めるはずがない。善い生活をおくり、正しい信仰をもつならば、だれでもキリスト教徒のみならず異教徒でも救われる。旧約聖書の「怒りの神」は外観にすぎない。カーネギーは先祖の長老派の教会を離れて以来、宗教的な人間ではなくなつたかのように書かれることがあるが、実際はそうではなく、その後はこのような普遍宗教的なスウェーデンボルグ派のキリスト教に親しんだのである。

自伝ではアメリカ、アレゲニーのスウェーデンボルグ派の宗教コミュニティについても触れられている。

アレゲニーの町で少数の人たちといつても、たぶん全部あわせても百名

(2) Carnegie (1920) 邦訳 32-33 ページ。

を超えなかったかもしれないが、スウェーデンボルグ協会を組織し、私のアメリカに住んでいた親戚たちは、その有力なメンバーであった。父は長老教会を脱退してから、この協会が建てていた教会に出席していたので、もちろん私はよく連れて行かれた。しかし、私の母は、スウェーデンボルグの教えになんの関心も示していなかった。あらゆる形の宗教に尊敬の念をいただき、神学的な論争は避けて、宗教を宗教として認めていた母は超然とした態度をとっていた。彼女の立場は、孔子のつぎの有名な格言でよく言い表されていると思う。「この人生のつとめによくいそしみ、他人のことに口を出さないのが、最高の知恵である」。母は、息子たちが教会と日曜学校に行くのをすすめた。しかし、スウェーデンボルグの著書や、新旧約聖書の大部分は神のことばをそのまま書き写したもので、人間の行為の最高の権威であるなどと考えていなかったのは明らかであった。しかし、私は、スウェーデンボルグの神秘的な教義にひどくひかれ、熱心な信者であったエートケン伯母に、師のいう「精神の価値」をよく理解しているとほめられたことがある。この私をたいそうかわいがってくれた伯母は、いつか将来私が新しいもとの都エルサレムの輝く光となる日をのぞんでいたようであった。それだけではない。彼女はひそかに、私が「神のことばを説く人」⁽³⁾ となって社会に貢献する日を夢に描いているようであった。

このように、カーネギーはスウェーデンボルグ派であった父親や親類の人々に囲まれて、スウェーデンボルグ派の宗教的雰囲気の中で、さらには牧師になることさえ期待されながら育ったのである。彼がスウェーデンボルグの著作にひどくひかれたことは彼自身が述べているとおりである。したがって、長じて彼がスウェーデンボルグ派の教会のメンバーとなることがなかったとしても、スウェーデンボルグの影響を軽くみることはできない。その意味で、カーネギーの詳細な伝記をかいたウォールがスウェーデンボルグの影響について次

(3) Carnegie (1920) 邦訳 62-63 ページ。

のように述べているのは理解に苦しむところであり、自伝のことばと矛盾する。新教会のステンドグラスから差し込む日光が床に美しい光の模様をつくりだすのを見て、カーネギーは涙が出るほど感動した。しかし「彼につとめて宗教教育を授けようとした父親から得られたものは、初めて美的感覚を味わうというこの不思議な体験のほかには何もなかった」⁽⁴⁾。

おそらくカーネギーが新教会のメンバーにならなかったから、そしてスウェーデンボルグについての十分な理解がないためにこのような評価を下しているのであろう。しかし、スウェーデンボルグの信奉者には組織に所属するかどうかにかかわらず多い。ジョン・ビゲローのように熱心なスウェーデンボルグの著作の読者でありながら、スウェーデンボルジャンと呼ばれることを嫌った人もいる。組織に所属しているかどうかという外面からはわかりにくいのがスウェーデンボルジャンである。少なくとも自伝を素直に読む限り、カーネギーへのスウェーデンボルグの影響は甚大であったと言わざるをえない。

彼の音楽への関心がスウェーデンボルグと関連していると述べているところも興味深い。少年時代、彼はスウェーデンボルグ協会の合唱隊の練習に頻繁に出かけていた。「私の最初の音楽教育は、ピッツバーグのスウェーデンボルグ協会のささやかな合唱隊ではじまった」⁽⁵⁾と彼は言う。カーネギーといえ、オルガンや音楽ホールの寄贈でも有名であるが、数々の名演奏が残された音楽の殿堂カーネギー・ホールも、彼のスウェーデンボルグの著作との出会いがなければ存在しなかったかもしれない。

3 富の福音

慈善事業について論じたカーネギーの論文「富」は、最初1889年6月の『ノースアメリカン・レビュー』に掲載され、1900年に「富の福音」と改題されてエッセイ集の中的一篇として出版された。その論文の中でカーネギーは現代の過剰の富の問題を分析し、金持ちはそれにはいかに対処すべきかを論じてい

(4) Wall (1989), 44.

(5) Carnegie (1920) 邦訳 64 ページ。

る。「われわれの時代の問題は、富を正しく管理し、友情の絆が、これからも富める者と貧しい者とを調和ある関係のうちに結びつけてゆくことである⁽⁶⁾」ということばで彼はこの論文を始めている。今日顕著になっている大富豪と貧しい労働者という対照は、社会の進化を示すものであり、それ自体決して悪ではないと言いながらも、その代償として両者間に軋轢が生じることを彼は認める。大きな格差によって使用者と労働者との関係は閉ざされ、相互の無知は相互の不信を生む。そして人間社会は同質性を失う。

ではどのようにこの過剰の富と貧困という問題を解決できるであろうか。彼によれば社会主義や共産主義は解決にならない。今日の社会の基盤である個人主義を捨て去ることは不可能だからである。スウェーデンボルグの描く天界は、たしかに彼にとって理想の社会であるが、それをそのまま地上の社会に適用することはできない。現実の世界は天界ではないからである。現実問題への対処において空想的理想主義は危険であり犯罪的でさえある。彼は次のように述べている。「今かりにも、今日の基盤である個人主義を捨てることが人類にとってよいことであるとすれば、つまり人間が自分のためだけでなく、同胞愛をもって同胞愛のために働き、すべての同胞と平等に分配し、スウェーデンボルグのいうように、天使たちが自分のためではなく、他人のために働くことによって幸福になっているような天国の理想を実現してゆくことが、より高い理想であるということを認めるとすれば、…それは進化ではなく革命である。…その結果は必然的に人間性それ自体を変えることになる。それは今日では、もしくはわれわれの時代では、実行不可能である。理論的には望ましいことであるとしても、それは遠い先の別の社会学上の階層に属することである。われわれのなすべきことは、現在なしうることを行うことだ⁽⁷⁾」。

つまり理想としてスウェーデンボルグの天界を心に描きつつも、自己愛と世間愛で汚れたこの世では富の偏在を認め、この世のルールに従いながら、局部的に蓄積された富を社会全体のために役立てていくほかない。そのような役立

(6) Carnegie (1962) 邦訳 248 ページ。

(7) 同上, 252 ページ。

ちを繰り返していくことによって人間社会は進化する。つまり個人主義、私有財産、富の蓄積、競争というこの世のルールを直ちに捨て去らなくても社会は改善できるというわけである。

それでは富を有益に使うためにはどうすればよいのか。カーネギーによると、財産の使い方には三つの方法がある。

1. 財産を子孫のために残す。これは社会のためにも子孫のためにもならないもっとも愚かな行為である。もし愛情から多額の財産を子供たちに残すとすれば、それは誤った愛情である。莫大な財産は、それを相続する者にとって善よりは悪に作用することがあることは疑う余地がない。もし親の務めが子供たちが怠惰な生活をしないように気を配り、立派な人物に育てあげることであるなら、それが実現するように監督すべきである。遺産を残すというのは子供の幸福のためではなく、家族の自尊心から出てくるものである。

2. 社会のために役立ててほしいと遺言して残す。残念ながら、このような遺産の多くは愚行の記念物にすぎないような使われ方をされている。ただ貧しい者にお金を配ればよいというものではない。みさかいのない慈善事業によって悪人や怠惰な人間を増やすぐらいなら、そのお金を海に捨てたほうがまだ人類のためになるであろう。ほんとうに社会のためになるように富を使うには、富を獲得するのに劣らない能力の行使を要するということを銘記すべきである。また、いかなる人間も必要に迫られて何かをしたからといってほめられるものではない。このような仕方で膨大な資産を残す人は、もしかりにもってゆけるとしたら何も残さなかった人だと考えられても仕方がない。

3. 財産の所有者が生前に社会のために役立つように処分する。以上から望ましいやり方はこれしかないということになる。「これには富の一時的な不平等配分を真に矯正するもの、つまり金持ちと貧乏人の和解が成立する—これこそは調和の世界であり、事実、共産主義の理想とは違って、現状をさらに進化させることを求めるだけで、われわれの文明を徹底的に破壊することのないもう一つの理想である⁽⁸⁾」。ただし前述のとおり、社会に役立つ慈善事業は難しく、注意深く行う必要がある。大事なことは「自ら助ける者を助ける」という原則

である。助力に値する者に援助し、助力に値しない者には援助すべきではない。徳を救済する以上に悪に報酬を与えることになってはならない。カーネギーは、そのような意味でほんとうの慈善事業というものを知っている人は少ないとして、ピーター・クーパー、イノック・プラット、チャールズ・プラット、リーランド・スタンフォードなど少数の人物の名前をあげている。援助すべき対象は、公共図書館、公園、レクレーション施設、芸術作品、国民の一般条件の改善に資するさまざまな公共機関などが考えられる。

このような慈善事業が広がれば、個人主義は継続していくが、百万長者はもはや貧者のための財産保管人にすぎなくなる。これによって富者の富は大衆に還元され、富者と貧者の問題は解決されるであろう。したがって富は福音なのである。

以上のような考えは、社会についてのあまりにも楽観的な見方であり、金持ちにそのような行為を期待することはほとんど不可能のように思われるかもしれない。しかしこれによって問題が解決することはないとしても、カーネギーの主張を支持する富者も多数いるというのがアメリカであろう。アメリカにはビジネスとも政府とも異なる第三勢力としてのエスタブリッシュメントが存在するという見方がある。ビジネスが利益を、政府が権力を目的とするのに対し、エスタブリッシュメントは公平無私と公共道徳を目的とする。そしてカーネギーはそのようなアメリカの第三勢力の形成に不可欠の重要性をもっていたといわれている⁽⁹⁾。ともあれ、「富の福音」の実践は富者には容易ではないことはたしかである。しかしカーネギーは自らのことばを実践した。そこにカーネギーのきわめて道徳的な一面をみることができよう。

4 富の福音とキリスト教倫理

ここで「富の福音」の背後にあるものを考えてみたい。彼がこのような考えを提唱するに至った理由である。それは一部は彼の良心の声であろう。彼は巨

(8) Carnegie (1962) 邦訳 256 ページ。

(9) Silk L. & M. Silk (1980) 邦訳 141 ページ。

万の富を築いたが、社会には貧困にあえぐ多くの人々がいた。しかもその富は、徹底したコスト削減によりもたらされたという意味で、労働者の犠牲の上に築かれたものであった。彼が慈善事業を行えば「汚れた金」を受け取るべきかどうかという議論が起こるほどだった。⁽¹⁰⁾「富の福音」や自伝はそのような批判への弁明という一面があった。当時の状況を考えれば、余財を誰もが納得できるような形で使うべきだという内面の声があったであろうと容易に想像できる。そしてそのような内面の声を秩序立てて説明する理論があった。それは「福音」ということばが示唆しているようにキリスト教の教えだった。彼の良心の声とキリスト教の教えがひとつになって「富の福音」が書かれたと私には思われる。

ところがカーネギーには宗教はなかったという説もある。再度ウォールの伝記を引き合いに出すと、そこではカーネギーは先祖のカルヴィニズムもスウェーデンボルグの神秘主義も捨て、そのかわりにダーウィンとスペンサーの進化論を見出し、その信奉者になったかのごとく書かれている。彼にはスピリチュアルなものを求める情熱がなく、無神論者になるほどの宗教的志向性さえなかったという。⁽¹¹⁾もしそのような見解が正しいとすれば、彼が「福音」というタイトルをつけたり、本文の中でキリストに言及するのは単に自分の見解を見栄えよく粉飾したにすぎないということになるだろう。しかし事実はそうではなく、彼にはしっかりしたキリスト教の倫理があったと考えるべきだと思う。生前にほとんどの財産を慈善事業に使ってしまうというのは相当の覚悟であろう。信仰なくして「富の福音」の実践ができるだろうか。

「富の福音」がキリストの教えの実践であるという考えは論文中の次の箇所に明確に示されている。「最高の生活はおそらく、トルストイ伯が示したようなキリストの生涯の模倣によって得られるのではなく、キリストの精神に動かされながらも、変化したこの時代の状況を認め、現在の変化した状況にふさわしいこの精神の表現手段を用いて、キリストの生涯と教えの本質であった、同胞の善のための労働を行うことによって、しかも異なったやり方で行うことに

(10) Van Slyck, A. A. (1995) 邦訳 18-20 ページ参照。

(11) Wall (1989), p. 365.

よって得られるのである⁽¹²⁾」。

陰鬱なカルヴィニズムとはすでに袂をわかっているのであるから、「富の福音」の中に示されているキリスト教は、少年時代に親しんだスウェーデンボルグ派のそれであると考えべきであろう。彼自身、ここで自分のキリスト教は、トルストイがあこがれた原始キリスト教のようなものとは違うと言っている。キリストの教えの本質は隣人愛で、それをどう実践するかは時代によって、また各人によって異なって当然であるという考えである。スウェーデンボルグの宗教思想との類似点を探してみるなら、たとえばカーネギーが信仰ではなく善行を重視するところ、社会のための役立ちを提唱しているところ、富は必ずしも悪ではないという考えをもっているところ、慈善事業の難しさを主張しているところなどがあげられる。以下、これらの諸点について両者の主張を比較してみよう。

まず善の重視であるが、スウェーデンボルグの宗教思想は「信仰のみ」の教義への批判という特徴をもっている。信仰はだいじであるが善が伴わなくてはならない。善と真理はひとつである。礼拝についていえば、礼拝には外的礼拝と内的礼拝があり、仁愛から切り離された信仰からは内的礼拝のない外的礼拝しかでてこない。それが偶像崇拜である。したがってほんとうの礼拝とは善を行うこと、役立ちをすることである。スウェーデンボルグはそう教えている。カーネギーの自伝にも同様のくだりがある。「ベンジャミン・フランクリンがいったように『神を礼拝する最高の態度は、人類への奉仕である』⁽¹³⁾というのを真理である⁽¹³⁾と考える」。フランクリンを引き合いに出しているが、ここではスウェーデンボルグの教えを述べている。

次に役立ちである。スウェーデンボルグの宗教思想のキーワードのひとつが「役立ち (usus, use)」であることは、私の以前の論文で何度も取り上げたので、ここでは役立ちについてのスウェーデンボルグのことばをいくつか紹介し、彼がいかに役立ちを重視しているかを例示するにとどめよう。

(12) Carnegie (1962), p. 25.

(13) Carnegie (1920), 邦訳 332 ページ。

スウェーデンボルグは述べている。「創造の目的はあらゆる種類の役立ちである」。「仁愛の善と呼ばれるすべての善は役立ちにほかならない」。「役立ちとは仁愛の実践である」。「すべてのいのちは役立ちのいのちである。役立ちがなければいのちはない」。「人が愛する役立ちそれ自身が、彼のいのちを決定する」。「主のみ国は目的と役立ちのみ国である」。「役立ちとはすべての人がそれぞれの立場で自らの務めを果たすことである」。

カーネギーもまた「富の福音」において富者の社会への貢献、役立ちを強調した。彼がスウェーデンボルグが使った use という用語を使ったことが判明しているので紹介しておこう。彼は1901年4月にイギリスの批評家・伝記作家のジョン・モーリーから、蓄財の原理を分配の仕事に適用するのは難しいでしょうという趣旨の手紙をもらった。これに対して、彼は「粘り強さとめざす港へのぐらつかない航海、自分の考えあるいはむしろ考えた後の結論への最大限の信頼、そしてとりわけ人気よりは役立ち (use) を上位に置くことです」と答えている⁽¹⁴⁾。さらに次のような事実もある。しばしば彼の寄付に対しては売名行為だという非難が浴びせられた。通常はそのような中傷を無視していたカーネギーだが、ボストン・フランクリン・インスティテュートに多額の寄付を申し出た際、理事の一人から、これはフランクリン＝カーネギー・インスティテュートへの名称変更を期待してのことなのですかと尋ねられた。さすがにこれに対しては「人気取りやただ自分を喜ばせるために何かをすることはありません。私は有用である (useful) と考えることをするのです」と答えている⁽¹⁵⁾。ここにもスウェーデンボルグの影響がみられる。

第三に、富は必ずしも悪ではないという主張について。スウェーデンボルグは天界に行くのに富者も貧者も関係ないと述べている。貧しいから天界にはいるのでもなく、富んでいるから地獄に墮ちるわけでもない。富者が神の国にはいるより、らくだが針の穴を通る方がもっとやさしいということばには霊的な意味があるのであって、文字通りにうけとってはならない。だいじなことはこ⁽¹⁶⁾

(14) Wall (1989), p. 805.

(15) Ibid., p. 823.

の世でつくる「いのち」の状態である。富を目的のすべてにする富者は地獄的であるが、常に神と天界に目を向け、富は役立ちをするための手段にすぎないと考えている富者は天界的である。スウェーデンボルグによれば、役立ちとは自分と自分の家族に必要なものを提供することであり、隣人や祖国が豊かになるのを望むことである。そしてそのような役立ちは当然ながら貧者より富者がより多くなしうる。⁽¹⁷⁾カーネギーの「富の福音」もこのような考えで一貫している。この論文は、持ち物を売り払い貧しい人々に施しなさいという聖書のことばを想起させる話で終わっている。そしてそのような行いをした金持ちに天界が閉ざされることはないだろうという。

最後に、慈善事業は実はたいへん難しいという主張も両者に共通する。みさかいのない慈善事業はかえって社会に害悪をもたらす場合があることをカーネギーは指摘しているが、スウェーデンボルグはこの点を非常に厳密な表現で次のように述べている。隣人愛はその人を愛するのではなく、その人の善を愛することであると。貧しい者乏しい者に施しをせよという聖書のことばもその霊的意味を理解する必要があるという。盲目的慈悲心で慈善行為をすると、悪人にも善人と同じように恵む結果、それによって悪人は悪事を働いて善人に危害を与えることがある。スウェーデンボルグは慈善事業には思慮が必要であると述べている。カーネギーもまた、誰彼かまわず大盤振る舞いしたわけではなかった。自ら助けるものを助けるという点に非常に注意を払いながら援助をした。

このように、「富の福音」の考え方は、スウェーデンボルグの教説にきわめて類似していることがわかるであろう。

(16) スウェーデンボルグによれば「富者が神の国にはいるのはむずかしい」の霊的意味は次のとおりである。富者とは認識や知識を豊富にもち、これらと自分の理知を用いて天界と教会の内容に触れようとする者のこと。それは神の秩序に反するのでらくだが針の穴を通る方がやさしいといわれている。らくだは一般的な認識や科学知識をさし、針の穴は霊的真理をさす。Swedenborg (1758) no. 365.

(17) Swedenborg (1758) no. 365.

5 社会進化論者

これまで述べてきたように、カーネギーは幼少年期に新教会に通っていたし、慈善事業にもスウェーデンボルグの宗教思想の影響が見られるのであるが、彼はスウェーデンボルグとは見なされてこなかった。そうではなく、彼はアメリカの社会思想史の中では代表的な社会進化論者 (Social Darwinist) のひとりとして位置づけられてきた。実際、彼自身ハーバート・スペンサーの信奉者であると公言していたし、ダーウィンとスペンサー以上に彼に影響を与えた人物はいなかったと自伝で述べていたので、それも当然のことかもしれない。1975年刊行のアメリカ古典文庫『社会進化論』の中にもカーネギーの著作が収められている。しかしすでにこの書物の中で、解説者の本間長世は「最近の研究の傾向は、カーネギーに及ぼした社会進化論の影響を大きく見ないと⁽¹⁸⁾ 言ってよい」と述べている。今日ではそのような見方が定着したと言えるのかもしれない。

ホーフスタッターが指摘したように、「進化論には競争や武力を弁護しなければならぬようなものは何もなかった⁽¹⁹⁾」。本来、進化論は競争と淘汰ではなく協力や博愛主義にその進化の原動力を見ることも可能な枠組みである。しかしながら、19世紀の最後の30年と20世紀初頭のアメリカではダーウィンの著作の影響を受けた社会思想が支配的になった、とホーフスタッターはいう。社会進化論は、個人主義・競争主義・自由放任主義・成功崇拜の保守主義思想である。それによれば、生存競争と適者生存のプロセスによって社会は進歩するのであるから、過激な社会改革は進化の法則を乱す愚かで無益な試みであるということになる。できるだけ自由に放任していたほうがよいのである。

カーネギーの著作にそのような考えを探すとすれば、「富の福音」の冒頭部分で、今日見られる所得の格差は遺憾なものではなく有益なものである、大きな不平等も地球全体が卑しくなるよりはるかによいと述べているところにわずかに見出せるかもしれない。しかしながら、全体として「富の福音」は慈善

(18) 本間長世 (1975) 9 ページ。

(19) Hofstadter (1944) 邦訳 243 ページ。

事業の勧めなので、カーネギーが社会進化論者を公言しながら、「富の福音」を書き、アメリカ最大の慈善事業家となったことはどうしても矛盾としか言いようがない。

伝記作者のウォールは、カーネギーは社会進化論者であると唱えながら、実際の行動においてはスペンサーの教えにそむくことを数多く行ったと述べている。理由として、カーネギーはスペンサーの理論をよく知らなかった、彼が拒絶した正統派神学への科学的反証をスペンサーは提供してくれた、人類は科学技術の発達によって世界を改善しつつあるというスペンサーの大きな理論枠組みに共感したなどをあげている。要するに必ずしも社会進化論者とはいえなかったということであろう。そして1900年以降は社会進化論を捨て革新主義の信奉者になっていった⁽²⁰⁾。本間は、矛盾に満ちた存在であったカーネギーは、社会進化論に関して自己矛盾的⁽²¹⁾存在であったと述べている。そうであれば、カーネギーのもっとも根底にあった思想がスウェーデンボルグであったという評価をしてもなんら問題はないように思える。

Ⅲ ま と め

最後にカーネギーとスウェーデンボルグとの関わりをまとめておこう。

1. カーネギーは特定の教会に属さなかったが、無神論者というわけではなかった。むしろ自伝でもプラトンを引用し永遠の生に希望をもつべきであると述べているように、死後のいのちを確信していた人だった。このような彼の宗教的態度にはスウェーデンボルグの影響があったと考えられる。

2. 彼は役立ち (use) のために慈善事業を行うと述べた。「富の福音」の考え方は社会進化論とは無縁である。それがどこから来ているかといえば、「福音」ということばからも想像されるように、キリスト教倫理ということになるであろう。そして彼はカルヴィニズムを拒絶し、スウェーデンボルグの教えに惹かれたと述べているので、それはスウェーデンボルグを通してえられた教え

(20) Wall (1989) pp. 396-397.

(21) 本間長世 (1975) 23 ページ。

であったと思われる。

3. 彼の周囲にはスウェーデンボルジャンが多数いた。彼の父親や親類がスウェーデンボルジャンであったことはすでに述べたとおりであるが、それ以外にも、次のようなスウェーデンボルジャンとの関わりがあった。彼は『見失っていた聖書が見つかった』の著者、ジョン・ビゲローとは旧知の間柄であり、二人でよくキリスト教について議論した⁽²²⁾そうである。また、彼はヘレン・ケラーの支援者であった。その関係で彼女個人だけでなく、ニューヨークとマサチューセッツの視覚障害者協会に寄付を行っている。ヘレン・ケラーがスウェーデンボルジャンであったことは、自らの宗教について告白した書物でよく知られ⁽²³⁾ている。

引用文献

- Carnegie, A., (1920), *Autobiography of Andrew Carnegie*. (Houghton Mifflin Company) (坂西志保訳 (2002) 『カーネギー自伝』 (中央公論社)).
- Carnegie, A., Kirkland E. ed., (1962) *The Gospel of Wealth and Other Timely Essays*. (The Belknap Press of Harvard University Press) (後藤昭次訳 (1975) 「富の福音」本間長世解説『社会進化論』 (研究社)).
- Edge, B. L., (2004), *Andrew Carnegie: Industrial Philanthropist*. (Lerner Publications Company).
- Hofstadter, R. (1944), *Social Darwinism in American Thought*. (後藤昭次訳 (1973) 『アメリカの社会進化思想』 (研究社)).
- Keller, H., (1927), *My Religion*. (Doubleday & Co.) (高橋和夫・鳥田恵訳 (2006) 『奇跡の人の奇跡の言葉』 (H & I)).
- Silk, L. & M. Silk, (1980), *The American Establishment*. (山岡清二訳 (1981) 『エスタブリッシュメント』 (TBS ブリタニカ)).
- Slyck, A. A., (1995), *Free to All: Carnegie Libraries & American Culture 1890-1920*. (川崎良孝・吉田右子・佐藤恭子訳 (2005) 『すべての人に無料の図書館』 (京都大学図書館情報学研究会)).

(22) Wall (1989), p. 363.

(23) Keller (2006) を参照。

Swedenborg, E., (1758), *De Caelo et de Inferno*.

Wall, J. F., (1989), *Andrew Carnegie*. (University of Pittsburgh Press).